
ポテトルームと双子の謎

ナナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポテトルームと双子の謎

【Nコード】

N9809X

【作者名】

ナナツ

【あらすじ】

とある自殺志願者の前に座った、少年少女の双子。彼らは傭兵らしい。今日も無事解決したのだろう、双子は夕食という名の反省会をし始めるが……。

のんびりお気楽ファンタジー世界です。

鳥のさえずりが穏やかに鳴く街に、まるでお菓子でできたようなパステルカラーの家がころんと建っている。ポートルームという、外見通り愛らしい名前の食堂はこの街でも他の街でも有名である。もちろん、うまいという意味なのだが、そもそもどうして「ポテト」という名前なのかが不明だ。

というのも、この街の名物はポテトではなく、この食堂のメインもポテト料理でもない。では何かと問いたいのだが……出てくる料理はどれも家庭的で、食べているうちについて故郷を思い出し、じわりと胸が温かくなるものばかり、その料理の飾りつけ自体も母親を連想させるものだが、料理人が調理したらしい、こだわりや愛らしさなんかもちらほらと見え、食堂には家族連れやカップル、女の子同士が多いというのも頷ける。

さて、こんなに素晴らしい料理を作る人物はというと、意外にも頑固をそのまま顔にくつつけたような、少々強面の中年男性である。外見についてとやかく言うものではないが、一言で表すのなら「話しかけにくい」に尽きる。ぎょろりと見開いた目やへの字に曲がった口、筋張った体つきはどう考えても友好的には見えない。気の弱い男、ヘリスの口からは到底「なんでポテトっていう名前にしたんですか？」とは出てくるはずがはなかった。

故郷の味に似ているシチューの残りをかき混ぜながら、ヘリスはため息をついた。不意に喧騒が耳に戻り、今が最も忙しい時間、正午だと言うことを思い出す。

とある街の食堂「ポートルーム」は評判通り、込み合っている。テーブルと言うテーブルはふさがり、色とりどりの料理、食器が並

び、銀色のフォークやスプーンが踊るように舞う。ヘリスの合い席（彼は一人でここに来た）の男女も楽しそうに食べている。

「冷めちゃいましたか？ 暖めなおしますよ」

それが自分に発せられたものと気付くのに数十秒かった。ヘリスははたと顔を上げると、看板娘のラツチェがにこやかにトレーを抱えていた。

この食堂は家族で経営しているらしい。料理人が父親、盛り付け、食器だしが母親、ウェイトレスが娘……その娘に時折なにやら怒られている、風来坊風の男が兄（ということ、先ほど小耳にはさんだ）らしい。

年のころは二十歳前であろう。ようやく子供らしさが抜けてきた、これから女性へと変貌するであろう独特の危ういかわいさがあり、花柄の三角巾とエプロンがまだ子供らしさを主張しているように見えた。

「え、ああ、まあ、じゃあ」

「では、少々お待ちください」

ずっとシチュー皿をトレーに乗せると、ラツチェのすらりとした長身が縫うように食堂をすりぬけ、奥へと消えた。ヘリスはぼんやりと虚空を眺めると、手持ち無沙汰になった両手足をどうしていいかわからず、とりあえず水を飲むことにした。

ヘリスはラツチェより年上なのだが、どうにもそうには思えない、と自嘲した。実際には心の中だけで笑ったので、顔はいたって平静であった。

そして、つぶやく。今日も死ねなかった、と。

ヘリスは自殺願望者だ。ではどうしてこんなにも暢気に、しかも生きながらえるような行為をしているかというと、彼はどうしても死ぬことができなかった。ヘリスはつい、指折りに死のうとした方法を数えた。

高いところから飛び降りる（二階の窓）、水の中に沈む（洗面器に顔をつける）、首を吊る（長い綱）、食べるのをやめる（でも水は飲む）、手首を切る（はさみ）、毒物（ソース一気飲み）……数えてみると、意外ときりが無い。

しかしどうしてこうも死ねないかと思うと、自分でも驚きである。ここまですれば普通、死ぬだろうと思うのだが、病院さえ行くことなく、そもそも誰もが彼が何をしているのか理解不能ときた。だから、死のうとしてるんだって、そんなメッセーじすら気付いてもらえない、不可思議な現象。ここまでくると、もはや自分は死んでいるのではと思うのだが、自分はこんなにおいしいシチューを作れないので、ここは現世であるようだ。

では、ナイフで首を切ろうかと考え、皮膚の薄いところをそつと指で探してみる。

「いてっ」

赤く膨らんだ部分に触れ、思わず手を引っ込める。先日、虫に食われたところだ。アレルギー反応でも起こしたらしく、かゆいというよりも痛い。つんつんと爪でつくだけでも痛く、中に芯のような硬いものがあった。ニキビに近いものかもしれない。

とりあえず、首は止めようと頷いたところで、客の数人が出て行った。代わりに、待っていたらしい客が新たに入ってきてヘリスの前に腰掛けた。

「あー！もう！お腹すいてイラつくわ！」

炎に似た、赤く透ける髪が揺れた。少女と言える年齢であろう、女の子が吼えるように叫んだ。歯をむき出す獣……否、気の強そうな顔立ちはしているがそれでもかわいい部類に入るであろう……ヘリスのように見えた。

「ラッチェー。早くウェリスンにエサあげてー」

平坦な声に、ヘリスはおや？と目線をずらす。少女の隣に、同じく赤い髪の少年が腰掛ける。何事にも興味なさそうな半眼をしているが、その作りや配置は少女のものとよく似ていた。兄弟であろうか。だとすると、顔つきや体つきは似ているが服装のせいだろうか、陰と陽の対極に見えた。

「あ、二人ともいらっしやいませ。久しぶりだね」

ラッチェはウェイトレスの顔からとたんに子供のように嬉々とした表情を浮かべると、水をトレーに席へ来た。確か、ウェリスンと言ったか、少女はグラスをひったくると一気に飲み干した。

「荒れてるなあ……」

ラッチェが苦笑を浮かべると、ウェリスンは水のおかわりを要求しながら「だって」と続ける。

「お腹すいてるんだもん！アスカってばケチってご飯ちつとも食べさせてくれないのよ！？酷い弟よね！」

「ウェリソンは食べすぎなんだよ。大体、ちつともって言うけど、一人前は食べさせてあげてるじゃん。それ以上食べると太るよ」

「太らないわよ！あたしの全エネルギーはご飯でできてるのよ！？それがなくなったら、盗賊退治もできやしないじゃない！」

「かといって、三人前以上食べようとするのはどうかと思うよ」

少女の体は華奢だ。長身のラツチェと比べれば大分小さく見えるだろうが、平均的な身長だと思われる。どこにそんなにも入る容量があるというのか。疑問に思っていると、どうやら弟らしい、アスカという少年が適当に注文を頼んだ。ちなみに、ポテト料理は含まれていない。

「アスカ……せめて、ここでは沢山食べさせてよ。お金はあるじゃない。幼馴染のために貢献してあげましょうよう」

親しく話していると思ったら、どうやら、ラツチェとこの兄弟は幼馴染らしい。ヘリスはこの店に数える程度しか来ていないので初めて知った。

「ラツチェのお財布をずっしりにしてあげましょうよう」

ウェリソンの言葉に、今まで無表情に近かった少年の顔が、少女よりも少女らしく華やかに微笑んだ。優美と言っている。柔らかく緩ませると、ゆっくりと口を開いた。

「見ての通り、僕たちよりも儲かってるし、僕たちの路銀もかつかつだっというところにそろそろ気付いてほしいんだよね……。ゆとり

があるっていうのは幻想だよ、ウェリスン」

静かに、諭すような。今まで怒りを撒き散らしていたウェリスンだったが、はたと思い出したように背筋を伸ばし「なんだかお腹ふくれてきたかも」と苦い笑みを斜めに浮かべた。すると、アスカは元通りの表情に戻り、何食わぬ顔で遠い目をした。そのギャップが恐ろしく、ウェリスンが大人しくなった要因もそこにあるのは見ての通りであった。

「こういう時に限って、うちのばか両親はいないんだから……。ご飯だって、うちで食えば安上がりなのに」

「しょうがないよ。二人が旅狂いなのは今に始まったことじゃないし」

言われてみれば、妙な話だ。二人は十代半ばを少し過ぎたあたりだ、まだ親の保護を受けてもいい年頃。そんな二人が食堂に、子供たちだけでいるというのはよくよく考えてみると不思議のような気もする。

「しかも、今回の依頼！折角達成したのに、お金減らされるし！子供だからって言っても、あたしたちは傭兵よ！ばかにするのは最もかもしれないけれど、だからといって油断はできない、そうでしょう？」

「……ウェリスン。確かに、子供だからお金は減らされたけど……それ以上に、ウェリスンがやりすぎなんだよ」
「う」

言葉に詰まる少女はまさしく幼さ残る顔つきだが、まさか傭兵とは。ヘリスは思わず二人を交互に見やるが、どの角度からどう解釈しても傭兵には見えない。子供の冗談かと思ったが、そんな冗談を

言うほどは幼くない。ヘリスはしみじみしながら水を飲むと、ウェリスンはくちびるをすばませ、拗ねたようにつぶやき始めた。

「しょーがないじゃない。家出息子って言うから、てっきりあたしたちぐらいだと思ってたら、まさかの三十路だし……。年齢を聞かなかったあたしたちが悪いんだけど」

「たち？」

再びの笑顔にウェリスンは目線をずらす。

「あたしが悪いんだけど……。それはいいのよ。あとちょっとで捕まえられると思ったところで、通行人を人質に取るなんて、卑怯よねというよりびっくりしたわ。しかも何あれ。家出の理由が、母親のご飯がまずいから、だって！うちだってお母さんの料理はちよつとまあ、微妙なんだけど……お父さんが上手に作れるからいいんだけど……じゃなくて」

「確かに、いきなりナイフ取り出したのはびっくりしたね。人質がおばあさんだったのが唯一よかったところだけど。これで暴れるような人質だったら、僕たちもピンチだったかもね」

「でも許せない！あんなに怯えるおばあちゃんの首筋を、ちよつと切ってみせたのよ！」

「ひいっ」

ヘリスは急いで口を押さえた。反射的に悲鳴が零れてしまい、しかも想像してしまったので全身が一気に凍えた。二人は一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに会話に没頭し始めた。

「あたし、許せなくて！自分で作った不条理を相手に押し付けるなんて言語道断！正義の方向が間違ってるわ！」

「だからって、銃で撃ち抜く？」

「ふぎゃ」

ヘリスはまた口を押さえた。今度はくしゃみをしたというふりをしつつ、再び駆け巡る寒気と恐怖に悶えた。銃？撃つ？とんでもない話だ。そもそも、子供が銃を持っていたいい法則などいつ生まれたのか。いや、傭兵をやっているのであれば当たり前なのだろうが、ヘリスは生まれてこの方銃などというものは持ったことがない。それが普通なのか、二人が普通なのかはわからないが、少なくとも、銃なしで生きて困ったためしはない。

「人聞きの悪い。違うわよ。掠めたのよ。ちょこっと。一発」

「嘘。三発。一箇所は服、次はこめかみ、最後に指。掠める程度でよかったけど、当たってたら死んでたよ」

「やあねえ。あたしがそんなへまするはずないじゃない。あたしの正義の弾丸は必ず悪をとめるわ！」

「しとめるなっていう話をしたんだけど」

「でもよかった。アスカが瞬時にあたしの行動に気付いて、おばあちゃんを保護してくれて。さっすがアスカ！」

ウェリスンは無邪気に笑うと、景気よくアスカの肩を叩いた。すると、ほんのほんのほんの僅かであったが、アスカの頬が赤らんだ、気がした。少しだけ穏やかな顔をしたのは気のせいだろうか。

「家出息子もびびって動けない……のが一瞬で終わると思いきもしなかったわ。いきなり動き出して、あたしを殴るんだもん。あれはびっくり。とっさに庇ったけど、痣ができちゃった」

ほら、と腕をめくると痣なんて生ぬるいものではない、青々と膨れ上がり、毛細血管が切れているのがわかるほど痛々しいものであった。ヘリスはついに絶句するが、話はまだ続いた。

「って、よく考えたら！あたしのせいじゃないじゃない！あの後、アスカが家出息子をけちよんけちよんに蹴り倒して殴り倒して、顔の原型なくしたのが減給の原因じゃない！」

アスカはいかにも「やれやれ」という表情と仕草をすると、嘘くさい笑顔を浮かべた。

「僕の服、黒いから血の色って目立たないよね」

そんな、見当違いにもほどがあることを言い、水を飲んだ。ヘリスは啞然とするしかなかったが、ウェリスンは高らかに「そういう問題じゃない！」とつつこみを入れていた。……ということは、砂粒一つないアスカの服には人の血が……。

「そのせいで依頼人に怒られるし、逆にお金取られるし。大体、三十にもなって家出っていうかご飯！最悪よ、もう……」

「確かに、最悪だったね」

「そんな依頼をする親もばかだし、受けるあたしたちもばかだし……。次はもっと普通の依頼を受けようね。盗賊退治がいいわ。気軽に倒せるし」

言って、少女の手に乗ったのは愛らしいぬいぐるみではなく、小さくて無骨な銃。それをまるで自らの腕のように取ると、得意げにくるりと回し、懐にしまった。

「二度と悪いことができないように、あたしがきっちり倒してあげるんだから！」

「意気込みすぎだよ。あ、ほら。料理が来た」

「あ、ちょ、ちょっとアスカ！あたし、にんじん苦手なのにわざと

野菜炒め頼んだわね!？」

「気のせいだよ」

やんわりと甘い匂いを振りまきながら、料理が次々にテーブルに並ぶ。そして、ヘリスの前にも温めなおされたシチューがそつと置かれた。

「すみません、遅くなっちゃって。これ、おまけです。よければどうぞ」

言って、置かれたのはレースのような華奢な皿に盛られた愛らしい丸いクッキーだった。お礼を言おうとしたが、ラツチェは素早くどこかへ行ってしまった。

シチューを平らげると、クッキーを一口で食べた。ナッツとチョコのチップクッキーもまた懐かしい味がした。もう一つは紅茶のクッキー。みつあみの形をしたクッキーは口の中でほろほろと解け、強い芳香が広がった。

しばらく味を堪能し、立ち上がる。客はすでにまばらで、そろそろひと段落というところだろう。ヘリスの席だけが山盛りの料理で埋め尽くされている。二人は楽しそうにあれやこれやと食べ、時折少女が怒りじみた声を上げた。

「ありがとうございました!」

支払いをすると、ラツチェはとびっきりの笑顔を浮かべて頭を下げた。ヘリスはまだ広がり続ける紅茶の味を味わいつつ、ぽつりと、ほとんど無意識につぶやいた。

「なんで、ポテトなんだろう。ポテト料理はないのに」

ラツチェは一瞬、何を言われたかわからなかったようだ。しばらくきよとんとすると、思い出したように「ああ」と目じりを下げた。

「それはですね」

思わせぶりに微笑む。ついにポテトルームの秘密が明かされる。

「内緒です」

思わずがくりと肩を下げるが、ラツチェはそれ以上本当に何も言わない様子だったので、残念に思いつつ食堂を後にした。

砂に埋め尽くされるこの世界に、砂塵が吹かない日はない。今日は風が強いため、一步踏み出した瞬間、腕や足に細かな砂がぺちぺちと音を立てて吹き付けてきた。僅かな痛みとかゆみを覚えつつ、ヘリスは空を仰いだ。まるで青い鳥の羽が溶け込んだような、真っ青な空にため息を一つ浮かべる。

——とりあえず、ポテトの謎が解けるまでは死なないでおこう。

しばらく自殺しないことを近い、とぼとぼと家に帰った。食堂から、今度はカレーの匂いがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9809x/>

ポテトルームと双子の謎

2011年10月28日00時08分発行